



Title	アメリカにおける都市政治の一例 —政治マシーンに属する人びとの社会的地位—
Author(s)	小川, 晃一; OGAWA, Koichi
Citation	北大法学論集, 31(3-4下), 317-346
Issue Date	1981-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16349">https://hdl.handle.net/2115/16349</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	31(3-4)2_p317-346.pdf



## アメリカにおける都市政治の一例

— 政治マシーンに属する人びとの社会的地位 —

小 川 晃 一

本稿は、ニューヨーク州オルバーニー市において久しく市の政治行政を牛耳ってきたボス・マシーンについての研究の一端であり、このボス・マシーン体制を支えてきた人たちが市でどのような社会的地位を占める人たちかを明らかにしようとするものである。これを明らかにするために、一般に、アメリカ社会におけるボス・マシーン政治と密接な関係をもつ移民の問題をまずみておこう。

—

アメリカ社会の重要な特徴の一つは、いうまでもなく、移民社会であるという点にある。ところで、この移民社

会 $\nabla$ を理解するうえで、移民が移ってきた時期、および——これと密接に関係があるが——どの国からの移民であるかを見ることは決定的に重要である。いうまでもないことながら、アメリカにおける $\nabla$ な国民は、古く植民地時代から移り住んできたプロテスタントのアングロ・サクソン系の人たちである。彼らはアメリカ社会の柱石とされてきた。多くの歴史家は、一九世紀初め頃までに移住してきた彼らを、それ以降に移住してきた移民と区別する。

ナポレオン戦争が終り、移民に対する制約がなくなるとともに第二の移民の時期が始まる。<sup>(2)</sup>交通革命によりアメリカへの旅は容易になったし、ヨーロッパの農村においては、人口危機がおとずれ、伝統的な農村体制がくずれ始めたのである。こうしてなん百万という人たちが海を渡ってやってきた。波は一八五〇年代に高くなり、一八八〇年代初めにはさらに高くなり、二〇世紀初めには絶頂に達した。これら第二の移民は、最初の移民が全く白人であり、またほとんどが英語国民からのものであったのに対し、ことばは様々であったし、髪の色は、ブロンドのスカンジナビア人、顔の浅黒いイタリア人、西インドの黒人等、様々であった。また、第一の移民がほとんどプロテスタントであったのに対し、極めてカトリック色の濃い人たちであった。世紀の終り頃までには、さらにこれに、ユダヤ人や東方のオーソドックス教会系のものが加わってくる。

南欧と東欧からのものが多い一九世紀末から二〇世紀にかけての新移民は、もはや希望の地で豊かな農業を営むことができなかつた。辺境はすでにふさがり、農業は機械化されて生産性は向上しており、新移民は農地を獲得することも、農村で労働の機会を見出すことも困難であった。圧倒的に多くのものは貧農出身であった。こうして新移民たちはもはや小さい町や村落に住むことができなない。彼らは、ミシシッピ河の東、オハイオ河、ポトマック河の北に移り、鉱工業地帯に集中的に集り、一九〇〇年までに外国生まれのもの三分の二は都市に住むようになり、一九二〇年までには四分の三がそうになった。

アメリカにおける都市政治の一例

一九三〇年の時点において、外国生まれのものか、どこに住んでいるか、都会か、あるいは地方の農場に住んでいるか、あるいは地方で農場以外のところに住んでいるかをみると、表によってわかるように、ヨーロッパからきたものはいずれの時期に移ってきたものをとっても、都市に住むものが圧倒的に多い（もっとも、北西部ヨーロッパおよびドイツから移ってきたものにおいては、他の国から

I 移民の出身国と居住場所 1930

出身国と移民の年	%			
	都 市	農 場	地 方	
<u>全 期 間</u>				
北西部ヨーロッパとドイツ	75.0	11.5	13.5	100.0
東部ヨーロッパ	86.9	6.6	6.5	100.0
南部ヨーロッパ	87.5	3.1	9.4	100.0
中部ヨーロッパ	81.6	6.6	11.8	100.0
<u>1925~1930</u>				
北西部ヨーロッパとドイツ	88.5	3.7	7.8	100.0
東部ヨーロッパ	93.2	2.3	4.5	100.0
南部ヨーロッパ	90.9	1.3	7.8	100.0
中部ヨーロッパ	90.7	2.4	6.9	100.0
<u>1901~1910</u>				
北西部ヨーロッパとドイツ	75.1	11.8	13.1	100.0
東部ヨーロッパ	86.9	7.0	6.1	100.0
南部ヨーロッパ	86.9	3.4	9.7	100.0
中部ヨーロッパ	80.6	6.8	12.6	100.0
<u>1900年以前</u>				
北西部ヨーロッパとドイツ	69.6	15.0	15.4	100.0
東部ヨーロッパ	81.8	10.1	8.1	100.0
南部ヨーロッパ	86.7	4.1	9.2	100.0
中部ヨーロッパ	77.1	10.6	12.3	100.0

移ってきたものに比べ、都会に住むものはより少ない」とはいえる。

こうして、「都市では、アメリカ生まれのヤンキー・プロテスタントのアメリカ人は、移民と顔をつき合わせるようになった<sup>(4)</sup>」のである。ボストン、シカゴ、クリーヴランド、ニューヨーク、フィラデルフィア、ピッツバーグ、セント・ルイスなど、北東部、中西部の典型的な都市では、アメリカ生まれよりも外国生まれの方がはるかに人口が多くなった。新しい移民たちは、都会に住んだばかりか、ビズネス街に接した都会の中心部に近くにかたまって住んだ<sup>(5)</sup>。彼らは、きた国、きた時期によってかたまる傾向がある。というよりは、ヨーロッパで同じ村、あるいは近辺の村から移ってきさえたのであり、新しく来たものも知った顔に出あい、同じ方言で話すことができた。こうした人たちが結婚その他でさらに結ばれ、それぞれの地区に同質的なコミュニティを形成する。結婚はすでにかなり密接な関係のネットワークをさらに広げるし、子供が生まれれば名親が関係に入り、新しいコネクションをつくり出す。これらパーソナルなサークルのなかに、密接でインフォーマルな集団生活が盛んになる。これに自発的集団の活潑な活動が加わってくる。例えば、シカゴにきた新来のチェコ人たちは一八七〇年と一八八〇年の間に四九の相互扶助団体をつくった。そのうちの三六は、故郷の村の社交のための一ブランチとしてつくられたのであった<sup>(6)</sup>。

各ソサエティは家族や近隣の人たちをより広い相互扶助の關係にひきだし、やがて大部分の家庭を一ラウンド目の組織生活にひっぱり出す、結社のプロセスをなした。合唱や演劇のグループは毎日のように新しいホールやサルーンに集った<sup>(7)</sup>。

移民コミュニティの形成は、一つには都市生活への適応であったし、一つには古き秩序モデルの再建であった。新来者は都市での将来を見るとともに、村の生活をふり返った。

移民はきた国、きた時期によってまとも、以前から住んでいる人たちからも、また祖国を異にする移民からも隔離

されて住んだ。いわば「コロニー」、あるいは「ゲットウ」をつくった。Ⅱ表は外国生まれの白人がアメリカ生まれのアメリカ人等と住居がどれぐらい隔たっているかを量的に示し、Ⅲ表はエソニック・グループ間で住居がどれぐらい隔っているかを示すものである。<sup>(8)</sup>年月を経るに従い、彼らは中心部から転出してゆくが、その後にはさらに新しい移民がやってくる。「新移民とその子供は、前の移民とその子供よりも都市の中心部に住むものの割合は大きい」<sup>(9)</sup>。シカゴについてこういわれている。<sup>(10)</sup>

ウエスト・サイド近辺は、シカゴにやってくる事実上すべての移民集団のたまり場となった。ユダヤ人がこの地区を占拠した時期は、長期に亘る一連のプロセスの一こま、つまり、ある一つの人口グループが他の人口グループによって大きくとって代られるプロセスの一こまにすぎないように思われる。しかしこのプロセスのなかには一見した以上の規則性がみうけられる。……ユダヤ人が定住し拡がってゆく過程で彼らはアイルランド人とドイツ人によつた。これらグループが転出したとき、この後にユダヤ人が入ってくるが、やがて、イタリア人、ポーランド人、リトアニア人、ギリシア人、トルコ人、最後に黒人が続いた。ほかの大都市、とくにニューヨークとフィラデルフィアでなされた観察によつても同じような継起の順序がみられる。この現象は、これら様々のグループが移民した時期の順序によるのみでなく、それぞれの国民の生活水準相互の関係及び先行者による後続者の魅力と寛容とによつていられるように思われる。

アメリカに移ってきた移民は、その他の国に移住した移民に比してユニークな役割を果す。アメリカ以外の国では産業は進んでおらず、このため、建設業ばかりか、かなりの技能・技術を要する仕事のために移民が求められた（例えばカナダ）。アルゼンチンでは、移民がヨーロッパ文化をはこんでくることさえ求められたのであった。ところが、アメリカでは、自前の中産階級の人たちの活動はすでに極めて活潑であり、経済の発展に欠けているのは、ほとんど労働者のみであった。移民第二期はアメリカの産業化の時期と一致し、移民はこれにぼう大な労働力を供給することになる。

そうした移民はすでに一九世紀二〇年代に現われている。エリー運河建設のため一八一八年三千人のアイルランド人が働いていた。ニューイングランドから移住してきてニューヨーク州西部の肥沃な土地で農業を営む人たちが多量に生産される農産物を安価に運びうるようにと、この運河の建設が要求され、始まったのである。本稿の対象であるオルバニーはこの運河（建設）の重要拠点であり、アイルランド人労働者のたまり場であった。なかにはオルバニーに住みついたものもいた。一八七〇年代までには工場で働くものの三分の一は移民ということになった（割合は一九二〇年代まで変らない）。

新しい移民の多くはヨーロッパで貧農であった人たちであり、産業上の何の熟練もたなかった。アメリカにいたとき、彼らは最底の条件で雇用され、アメリカ人やアメリカナイズされた移民も卑しむほどの低賃金をうけいれ、そうした条件でがまんして働いたのであった。八〇年代は、企業が大規模化し、荒々しく金もうけする成り金の時代であり、従ってこの時期の移民問題は階級（対立）の問題ともなった。例えば、イリノイ州では、組合員の四分の三は外国生まれとなる（組合のリーダーにはイギリス人とアイルランド人が多い）。アメリカ鉄鋼業協会は、「移民問題を扱うことなしにはうまくかつ徹底的に労働問題を扱うことはできない」とまでいっている。労働組合の組織化も彼らに負うところが多い。「組合に入っていない労働者やホワイトカラーは、産業の不満の波がなんらかの仕方外国人に勢いづけられているのではないかと疑い始めた。一八八六年のシカゴにおける大衆暴動もこの恐れに火をつけた」のである。<sup>(11)</sup>

移民問題は、資本家と労働者の対立抗争の問題に限られない。移民は、きた国、きた時期によってまとまり、以前から住んでいる人たちからも、また祖国を異にする移民からも隔離されて住む傾向があった。これら移民は、互に対立し抗争した。ペンシルヴァニアの炭坑夫は、後にはいつてきたイタリア人、ハンガリア人、ポーランド人の労働者たちのことを、墮落し屈從的な類の人間どもであり、彼らの存在によって、自分たちの賃金上げや労働条件の改善の努力を

無にするものとして彼らと争った。一八八〇年代アメリカの大都市は危機的様相を呈し始める。シンシナティでは一八八四年暴動が起った。「大都市における民衆の危険な傾向は明瞭に認められる」と『ニューヨーク・トリビューン紙』は報じている。一八八六年におけるシカゴのヘイマーケット事件はその最も顕著な事件であった。こうした危機は移民と結びつけられてみられる。一八八五年に出版され、驚くべくポピュラーとなったストロングの著書『われわれの国』Our Country は、宗教、道徳、政治における危機が都市に集中し、とりわけ階級間の争いに現われているが、こうした危機は移民により惹起せしめられているとする<sup>(12)</sup>。犯罪、不道徳、都市政治の腐敗、カトリックと社会主義を伝波せしめているのも移民であるという。合衆国移民委員会（一九〇七—一一年）は、経済上の観点から論じ、四二巻のリポートを提出し、これによると、ヨーロッパ南東部からの移民は、極端に都市に集中し、極端に非熟練労働に従事し、定住の意志があまりなく、ヨーロッパに帰りがつていくとする。移民制限同盟に始まる批判者はさらに極端な意見を持ち、スラムの拡大、犯罪、病氣、不健康の著しい浸透は新移民に關係があるとした<sup>(13)</sup>。

辺境の消滅によって移民はますます都市に集中するようになり、スラム問題を複雑にし、古くからの道徳をくずし、階級間の裂け目を広げ、ボス支配を強化した。労働組合員の多くは移民であった。移民は労働者にとっては賃金をひき下げる障害であり、プロテスタントにはローマの手先きであり、改革者には、都市の卑劣さと腐敗の根源であった。要するに、移民に対する批判者には、新しい移民は分裂と抗争の種であった。移民制限法が盛んに論ぜられるようになったのはこうした情況においてである。政治マシーンの隆盛はこうした事態を基盤にしていた。

新たに移ってきた貧しい移民は、アメリカの發達した民主主義制度の下でただちに政治のなかに巻きこまれた。多くの州ではいずれの政党とも移民の票を活用しようとする。政党活動家は、移民たちを融通のきく裁判官のところに、大

説きよしてつれてゆき、帰化のための手続用紙を買いとってやり、投票所までつれていった。有権者資格は個々の州によりきめられているが、多くの州では、市民になる意図を宣言しさえすれば、彼ら移民にも投票権が与えられたのである。<sup>(14)</sup> 本稿のテーマであるマシーン政治は、こうした下層の移民労働者と密接に関係している。まず、都市においてボス・マシーン政治が隆盛する時期は、一九世紀末から二〇世紀にかけて大量の移民が移住した時期に始まる。移民は△古典的な▽ボス・マシーン体制の支持者となったし、ボス・マシーンは彼らの保護者となったのである。ニューヨークとボストンにおいて、アイルランド人がはじめて市長に選ばれたのは八〇年代である。

マシーンが発達したその基礎は、社会的に不完全にしか統合されず、文化的に不完全にしか同化しえない都市に移住してきた移民であった。彼らは産業の未発達なヨーロッパの地方の村落からきた。従って政治的にも未成熟であった。これら移民はアメリカにきてから、都会で△原子▽のように孤立して生活したのではなかった。同じ国からきたものは互に△同化▽し、都会のなかで閉鎖的で親密な関係をもつ△部落▽をつくり、親類縁者の関係と友人関係をもとに近隣関係として結ばれたのであった。<sup>(15)</sup> マシーンはこのコミュニティに結びつき、その支持をえた、というより、このコミュニティを組織化したのである。マシーンの末端の活動家がマシーン（都市の政党）のために支持を動員できたのは、この狭い人間関係のネットワークを組織化しそれを維持することに重要な役割を果たしたからである。マシーンが彼らに関係するその仕方は、単なる物質的関係以上のものであった。「ビジネスの組織というものは、被用者に対し確かで緊密なコントロールを確保するため主として（給料のような）特殊な物質的刺戟に依存し、この点でマシーンである。政治マシーンは、票を獲得し選挙に勝つという特定分野でのビジネスである」<sup>(16)</sup> という。しかし政治マシーンへの奉仕の代償が物質的報酬であるというのは必ずしも妥当でない。あるものには物質的報酬は重要であろう。とりわけ、一般有権者ではなく、マシーンに属するものにとつてはそうであろう。また一般有権者⇨支持者に対するマシーンの側の△友

情 $\nabla$ は実は計算ずくであることが多かるう。しかし、多くの一般の支持者はマシーンとの関係を友情の関係とみた。寒いクリスマススの日に贈られる一ぱいのバケツの石炭は、マシンの手足となつて働く人たちが自分に対してもつ友情のあかし、尊敬のあかしでさえあつた。ソシアル・ワーカーの先駆者ジェーン・アダムズによれば（一九〇二年）、「一般に、贈りものは、ごく単純に、まごころからの親身の好意のあかしとみられた。エルダーマンは良き友であり近隣者であるがゆえに選ばれた」のである。一般有権者に対するマシンの手足となつてゐるものの関係は、パーソナルで好意にみちたフェイス・トゥ・フェイスの関係で、よろず万般にわたるものでなければならなかつた。マシーンが一般有権者に提供するのは、物質的なものの分配や恩恵的なものよりは、 $\nabla$ 連帯 $\nabla$ であり、物質的なものや恩恵的なものは連帯をつくり出すというよりはそれを促進するものであつた。世紀の終り頃タマニー・ホルルのボスであつたクロロー $\text{---}$ は、「感謝こそ私の知る最も美しいことばであり、「忘恩のものよりも私のものを盗むものの方がまだよい、家族や友人に対する忠実さは人生のすべてだ」とい $\text{---}$ ている。独立 $\text{---}$ ということを重んじてきたアメリカの政治のなかに、人に対する忠誠心という新しい徳目をもちこんだのは、マシンのリーダー層を最初に供給したアイルランド系のものであつた。

移民は、伝統的な政党により組織されたばかりか、 $\nabla$ アメリカ人 $\nabla$ に抵抗さえした。政治において彼らが $\nabla$ アメリカ人 $\nabla$ に対抗するのは比較的容易であつた。投票権はアメリカの政治構造の要めをなすものであり、移民たちはこれをフルに利用したのである。新しい移民をきそに、初めにマシーンをつくり、WASPに対抗したのはアイルランド系アメリカ人である。北東部の都市に住んだ彼らは、そこに根強いWASPのイスタブリッシュメントから差別をうけていた。彼らのうち活動的で地位を求めめるものは、この差別に対し、ユダヤ系の人たちとともに挑戦した。もともと英語が話せたし、「口がよくまわり、気軽で気安いマナー」をもつ彼らはこの役に適していた。彼らはカトリック教会を支配

説  
論  
し、いくつかの地域では民主党を牛耳り、ヨーロッパ南部及び東部からきた新移民のチャンピオンになった。移民たちの投票権についてブローカーの役割を演じたのは彼らである。ドイツ系のもが技術及び商業にすぐれていたとすれば、彼らは政治に適していた。

ドイツ系の人たちはパン屋、靴屋、肉屋、大工、木細工師、車製造、おけ屋、仕立屋、独立的な製造業、というような熟練を要する仕事で、他の移民の二倍以上の数のものが働いていた。アメリカでこれよりみじめな資産で人生を始めたアイルランド系のもものは、彼らのあとに都市に群がってきた——やがてそうなる——ライバルにリーダーシップと組織化の役割を供し、広範な勢力をもつようになった。<sup>(19)</sup>

アイルランド系のもものは、後に続いて入ってきた人びとを組織し、そのリーダーシップをとることによって、「宗教、政治、組織労働において権威ある地位に達し」<sup>(20)</sup>たし、第二世代のもものは、監督的な仕事、もしくはサービスに結びついた仕事について成功した。政治において彼らが果たした役割はとりわけ顕著であり政治はヤンキーがもつ優位をくつがえず恰好の領域となった。ヤンキーは彼らに対抗するために、共和党の側に結集する。

一九世紀末からきた新移民自身も激しく対抗した。ユダヤ人はとりわけそうであった。彼らのなかにはアメリカ人の公衆に匹敵するだけのインテリゲンチアがあり、またすでにアメリカの生活に十分根づいたリーダーがいた。彼らは侮蔑や危害に対し敏感であり、自己の権利のために大胆に戦う伝統をもっていた。移民のために豊かなリーダーシップを提供したのは彼らである。

移民制限法に積極的であったのは初めから共和党の方であった。この立法を求めるリーダーは共和党から出たし、つぎこんだエネルギーも、投票も共和党の方がずっと多い。北部及び西部において、共和党は自らよりよい階級のもの

のと考える人たちをひきつける傾向があった。「リスペクタビリティと美德と地位の保護者」であった。<sup>(21)</sup> 中産階級の改革者、世間を低くみるインテリゲンチアー、比較的豊かな労働者、地位と伝統を意識している多くのホワイト・カラー層、つまり、階級対立の激化にいらだつ人たちをひきつけたのである。これに対し、移民問題が深刻になった東部においては、民主党は外国生まれのものと結びつき、共和党と対抗した。「北部全体を通じ大部分のコミュニティでは、二つの政党は本質的にエソニックな連合であった」<sup>(22)</sup>。ニューヨーク州北部のあるメソジストの牧師は、こうした分裂がいかに完全で余すところがないか、をつぎのようにいっている。<sup>(23)</sup>

彼「ある人物」が教会のセミナリーに行ったとき、クラスのメンバー全員が共和党支持者であること、彼らのクラスメイト全員が共和党支持の家庭からきたことは、当然の事であった。……実際、一般の人たちのなかにおいてさえ、テロンは一人の民主党支持者に会ったことがなかった。どんなによくみてもそうであった。彼が政治のことはあまり知らないことは確かである。彼がコーナーに追いつめられ、彼自身も加わっているこの驚くべき党派的一体感を説明するよう強制されたとしたら、おそらく彼は「戦争」〔南北戦争〕をあげるだろう。戦場の最後の一弾は、彼がまだベティコートをきいているときにはなされたのだ。しかし、彼の第二の理由は、確実に、アイルランド人が他方の側にいるということであつたらう。

## 二

伝統的にマシーンを支持してきたのは貧しい移民たちであった。現在はどうであらうか。

かつて、移民たちはWASPのものたちと離れたところに住んだ、また、各エソニック・グループは他のエソニック・グループのものから離れ、集団をなして住んだ。現在はどうかであらうか。二〇世紀前半、移民は住居がアメリカ生

まれのものと明瞭に隔離されているのであった。しかし、II表<sup>(24)</sup>によってもわかるように、一九一〇年から一九二〇年にかけて、また、一九三〇年から一九五〇年にかけて、隔離の度合はうすらいでいる。また、(一九二〇年から一九三〇年にかけてはわからないが)、一九三〇年においては移民の子供は両親の移民よりも、両親がアメリカ生まれのものとはべて隔離の度合は小さい(同表、(6)、(7)の比較)。「つまり、ダンカンとリーパースンによるシカゴについての報告の結果、つまり、エソニック・グループが時とともに一層分散するようになる傾向はかなり広範に亘り妥当するように思われる<sup>(25)</sup>」と、移民間の住居の隔離についても同様のことがいえる<sup>(26)</sup>(III表)。

移民の都心部への集中についても同じことがいえる。移民は——アメリカ生まれのものよりも——都心部に住む割合が高い。しかし、アメリカ生まれのものに比べた移民の都心部への集中度は、一九五〇年の方が一九三〇年よりも小さくなっているし、また、一九三〇年の時点

II エソニック・グループとアメリカ生まれのものとの居住地の隔離の平均指標

都 市 (1)	F B W対NW				FBW 対 NWNP	NWFM P 対 NWNP	FBW : Foreign-born white NW : Native white NWNP : Native white of native parentage NWFMP : Native white of for- eign or mix- ed parentage a : シカゴで用いら れているコミュニ ティ地域 b : 1930年と1950年 とで比較しえない c : 世帯主のデータ にもとづいている
	Wards		Tracts <sup>a</sup>		Tracts <sup>a</sup>		
	1910 (2)	1920 (3)	1930 (4)	1950 (5)	1930 (6)	1930 (7)	
ボストン	33.6	32.3	40.4	37.5	41.8	39.4	
バッファロー	41.2	38.8	42.8	38.2	43.4	39.2	
シカゴ	40.6	34.3	39.4	35.9	42.4	38.6	
シンシナティ	38.5	33.8	41.0 <sup>b</sup>	39.9 <sup>b</sup>	42.5 <sup>b</sup>	37.6	
クリーヴランド	35.4	30.8	44.9	40.1	48.4	46.5	
コロンバス	39.1	38.8	46.7	38.3	47.6	39.6	
フィラデルフィア	39.7	34.4	44.3	40.8	47.3	43.5	
ピッツバーグ	37.3	34.4	42.6	38.4	45.3	42.5	
セント・ルイス	35.7	31.7	48.8	37.6	42.0	38.0	
シラキューズ	36.5	31.8	47.6 <sup>c</sup>	39.3	49.4 <sup>c</sup>	42.9	

アメリカにおける都市政治の一例

をみると、移民の子供は移民よりも都心部への集中度(28)が小さい。

このように、アメリカ社会のエソニックな性格は、二〇世紀、とりわけ移民制限法が通過した二〇年代以降、色あいがうすらいだということが出来る。ただ、第二次大戦後も残ったというところに着目しておかなければならない。その限りでは、マシーンが移民、あるいはエソニックな要素に結びつく古典的Vな形態はありえることになる。

同様のことは、エソニック・グループの職業構成をみてもわかる。第二次大戦後(一九五〇年)になされた国勢調査によれば、フィラデルフィアにおける各エソニック・グループおよびアメリカ生まれのものの職業構成はIV表のごとくである。(29)この表の数字によつて、各エソニック・グループの職業構成がアメリカ生まれのものとの職業構成にどれぐらい近いかをみる事ができる。例えば、アイルランド生まれのものにおいては、専門職関係の職業についているものの割合は

III エソニック・グループ間居住地の分離の平均指標

	F B Wグループ間の分離				NW F M P グループ間の 隔離
	Wards		Tracts <sup>a</sup>		Tracts
(1)	1910 (2)	1920 (3)	1930 (4)	1950 (6)	1930 (6)
Boston	46.2	43.0	54.2	50.6	52.7
Buffalo	56.0	53.3	58.4	52.0	56.1
Chicago	54.1	47.7	54.2	50.1	51.5
Cincinnati	50.4	45.2	52.4 <sup>b</sup>	48.4 <sup>b</sup>	47.9
Cleveland	50.6	43.5	60.8	54.3	60.6
Columbus	51.2	49.4	57.3	49.3	51.4
Philadelphia	51.6	46.5	57.2	53.0	54.6
Pittsburgh	51.8	47.9	57.4	51.6	55.6
St. Louis	48.4	44.2	55.4	49.9	52.6
Syracuse	47.8	45.0	61.4 <sup>c</sup>	53.8	57.4

a, b, cはII表の場合と同じ。

二・八%とごく少なく、アメリカ生まれのものの一〇・六%に遠く及ばない。また、イギリス生まれのもの職業構成は、アメリカ生まれのもの職業構成に非常に近い。専門職についてみると、一〇・八%と一〇・六%であるし、人夫についてみると、いずれも少なく、四%と四・九%である。イタリアからの移民はこれに対照的である。専門職のものは二・三%で最低であるし、人夫は一五・四%で最高である。フィラデルフィアでみられるこうした傾向は、同じ国勢調査のときになされた他の九つの大都市の調査でもみられる。(30) 一九五〇年当時の大都市においてはこうして職業構成はエソニック・グループによって違っていた。

移民の子供(二世)はどうであらうか。V表でもわかるように、(31) エソニックの相違によっても異なるが、彼らがつく職業は、両親がアメリカ生まれのものがつく職とは違っているものの、その相違は一世の相違よりも小さくなっている。これはフィラデルフィアについていえるし、他のメトロポリタン地域についてもいえる。

IV フィラデルフィア標準メトロポリタン地域におけるアメリカ生まれの白人及び外国生まれの男子のつく主な職業

	イングランド ウェルズ	アイルランド	ドイツ	ポーランド	オーストリア	ロシア	イタリア	アメリカ 生まれの 白人
専門、技師等	10.8	2.8	7.6	3.7	6.2	7.3	2.3	10.6
ファーマー等	0.8	0.9	2.5	1.3	2.8	0.5	1.5	1.3
マネージャー、公務員等	11.3	8.7	12.6	13.0	19.3	35.2	9.8	11.8
事務、セールス等	14.6	9.1	7.9	5.8	11.5	15.7	5.1	18.5
熟練労働者	29.1	24.0	39.7	24.1	26.6	19.4	29.5	23.7
非熟練労働者	19.2	22.0	19.4	31.3	17.4	15.7	23.7	22.5
家事	1.1	1.0	0.6	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1
サービス	8.1	17.0	7.1	8.6	8.7	3.8	12.0	5.5
家事農業労働者等	...	...	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1
農業労働者等	1.0	1.2	0.5	0.8	0.1	0.2	0.7	1.1
人夫	4.0	13.4	2.1	11.1	7.0	2.0	15.4	4.9
全体(概略)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

アメリカにおける都市政治の一例

オルバニーがそうであった。別の方法であるがこれを確かめてみよう。まず、六二年知事選挙のときの投票結果をみることにする。市全体では、共和党候補（ロックフェラー）に投票したものは、二万一〇〇〇名、民主党候補に投票したものは四万一〇〇〇名で、民主党候補に投票したものは共和党候補に投票したものの二倍である。ところが、つぎのような下町、都心部では倍率はずっと大きい。

	第三区	一一一対一〇七四
		九・九倍
同四		二一二対一一九〇
		五・九倍

V アメリカ生まれの両親をもつ男子と移民の男子との職業構成の相違指標

標準域	標準メトロポリタン地域	準地	世代	イギリス	アイルランド	ノルウェー	スウェーデン	ドイツ	ポーランド	チェコスロバキア	オーストリア	ロシア	イタリア
ボストン			第一世代	13	31		40	18	23			21	31
			二	6	8		14	8	16			24	20
シカゴ			第一世代	13	25	28	33	20	27	28	21	19	26
			二	6	10	8	10	8	18	12	7	25	13
クリーヴランド			第一世代	14	30			20	27	28	23	18	27
			二	6	9			9	22	18	14	19	15
デトロイト			第一世代	14	12			22	18		13	21	19
			二	8	12			9	11		4	26	6
ロスアンゼルス			第一世代	10	16	19	24	12	16		15	22	18
			二	8	10	6	9	7	14		14	29	6
ニューヨーク			第一世代	13	26	29	32	21	22	22	18	24	28
			二	7	10	10	11	9	9	18	11	23	19
フィラデルフィア			第一世代	9	21			20	21		18	24	25
			二	6	8			10	17		6	32	14
ピッツバーグ			第一世代	11	20			21	24	25	19	22	21
			二	7	11			9	16	10	15	27	10
サンフランシスコ			第一世代	9	22		23	13				12	24
			二	7	11		8	7				18	12

同五 三三二対一五三三 四・六倍

同七 三六八対一六八九 四・六倍

論 同八（黒人街）二五八対一二九九 五・〇倍

市内でも下町は、下層階級の人たち、及び黒人が住んでいるところであるし、第三、第七区はアイルランド系のもが多く、第八、第五、第七区はイタリア系のもが多く、第八区は黒人が多い。こうすると、オルバニーでは、まだ、伝統的なマシーン政治の基礎が——むしろシカゴにさえ劣らず——残っているとさえいえるのである。

伝統的なマシンの勢力に結びついたのは貧困な移民であった。移民制限法が通過した二〇年代以降大量の移民はなくなってしまった。また、移民や移民の二、三世も、第二次大戦後は都心から離れ、郊外に住むようになった。こうすると、エソニックな△古典的▽コミュニティやそれを基礎としたボス・マシーン体制は衰退してしまうであろう。アメリカの知識人は——マシーン体制はともかく——かつての全体主義による多様性の破壊に変わり、近代化する現代文明による、一層微妙でより一層滲透力のある画一化の傾向に困惑した。「合衆国においては、テレビ、官僚制、サバービアは、エソニックな相違をより一層破壊するように思われた。」<sup>(32)</sup>人種が同化の方向に向うのは——インテリたちは何らかの形の多元的統合を望んだのであったが——不可避のように思えた。ところが、六〇年代末エソニックシティへの主張が爆発的に再現する。それが一時的なものであるなどはそう簡単に結論はだせまい。ある著者によれば、エソニックの壁やグループへのコミットメントがしばしば強調されすぎてきたように、同化主義者は、アメリカの開かれた社会ではエソニックな結びつきが簡単に解消しようと「過まって」考え勝ちであるという。△メルティング・ポット▽の考えはエソニックな結びつきの持続性を見落しがちなのである。移民に結びついた伝統的なマシンの勢力も、そう簡単に

は消えうせず、戦後もずい所で持続した。都心に近い場所での△古典的▽な形態さえ、オルバニーを含め、かなり多くの都市で生きのびた。しかも、南部からの黒人の移動やプエルトリコ人の移住があり、たとえより規模の小さいものであっても従来型に近いマシーンが機能する余地が加わった。テレビ、官僚制、サバービアの発展という近代化のなかで、これに反撥する非合理的な——例えば若者の——爆発があったが、マシーン政治の△非合理性▽もそう簡単には死に絶えなかった。このことを理解するためには、マシーン政治に含まれた様々の側面、貧困階級との結びつきや△便利屋▽的機能による人間関係の形成・維持の面に目を向けねばならない。

マシンは、下層階級（かつては多くは移民そのものであった）のパーソナルな事柄に対する△パティキュラリストイックな▽関心に特徴があった。戦後もマシーンと比較的下層の階級との結びつきが続いたことは、シカゴやフィラデルフィアの調査からも明らかである。<sup>(34)</sup>しかし、現代ではマシーンが与える物質的恩恵は、少なくとも一般の支持者のレベルでみる限り、それほど重要なものではなくなっている。マシーンにかわり、連邦や州が社会保障を供するようになり、それだけマシンの機能低下があったこと、このことはよくいわれることである。経済的に貧しい人たちにさえ、マシンの物質的扶助はそうありがたがられることはなくなった。現在のシカゴ・マシンを調査したある著者は、「党のサービスをうけるものは、物質的の必要によって最も簡単に動かされると思われがちな人たちではない」とさえいっている。<sup>(35)</sup>少なくとも最近のシカゴについてのこの調査に関する限り、一般有権者のレベルでは、マシーンと特定エノンニック・グループとの結合は弱まっているが、そればかりか、特定の階級（貧困階級）との結びつきも弱まっている。にもかかわらず、マシーンが持続しているのは、マシーンが△ユニヴァーサルスティックな▽機能を果すようになってからである。マシンは、サービスをすべき人びとを特定の層に限定せず、マシンのサービスを求めようとしているものには誰にでも目を向け、できるだけ広い層にサービスを供しようとするようになった。行政に積極的にサービスを

を求める人には活潑な中産階級の人たちの方が多くさえあるから、行政を掌握するマシーンはこうした中産階級の人たちとも関係をもつようになった。マシーンに対する彼らの支持は、かつてとは違い、強かつ情感的なものではなくなったが。

では、マシーンと下層の階級の人たちとの結びつきはなくなってしまったのであろうか。これを見るには、マシーンを支持する一般有権者と、マシーンの組織に属する人たちとを区別しなければならぬ。後者にも階級の特徴はなくなっているであろうか。これをみよう。

アメリカの基礎的な政党組織であるマシーンに属する人たちは、組織内でかなり高い地位を占める人たちでさえ、社会的地位は必ずしも高くはない。七〇年代初めシカゴの地区組織（「クラブ」）に属する人たちの社会的地位について調査をしたある著者（上掲）によれば、クラブ員はメンバーとそうでないものとの間にいやになるほど強い区別を設けるが、レギュラーな民主党組織は威信あるグループとはいえないとしてつぎのようにいっている。<sup>(36)</sup>

例えば、市自治体法律顧問団内の弁護士とか電気局技師とかのように少数の専門職レベルの地方公務員もいるが、低い地位の事務員とか肉体労働者が圧倒的に多い。パトロネジ職にあるものの平均収入は一九七二年八〇〇〇ドルちょっとである。クラブの内部資料からのデータにもとづいた上掲表に示されているように、パトロネジ・ワーカーの給与水準は、地区内でも場所によって異なるし、町内キャブテン（これはオルバニーのコミティーマンにあたろう）は、概して、他のクラブ員よりいく分給与水準が高い地位にある。しかし、……党活動家の収入水準は彼らが住んでいる場所に住む家族の平均収入より低い。

こうして、「一般的な職業上のプレステイジに基づいてみると、地区の住民は地区のクラブ員を見上げる理由をほとんどもたない」ことになる。こういう地位の相違によって、住民が地方政府で働くもの一般に対し、とりわけパトロ

ネジ職にあるものに対し、いくイメージは一層悪いものとなる。多くの人たちは、彼らを寄生的でよこしまな人間であり、私企業で仕事につくことのできないものとみる。「こういうネガティブなイメージが広がっており、それはコミュニティの中産階級の人びとに限られない」といふ。政治的活動層については、彼らの社会的地位の低さは依然として続いているのである。マシンの一般支持者との比較ではかつてとはむしろ逆になったといえるかもしれない。イギリスの場合とも逆であろう。活動家層の社会的地位は一般の支持者よりも——それぞれの党で——社会的地位が高い。

オルバニーをみてみよう。マシーンに属する人は、市長や有力法律家は別としても、ほかにはマシンのなかの有力者といえども、それほど高い地位のものとはいえない。マシンの有力者を取りあげ、その職業をみてみよう。マシンの中枢にいく少数の人たち（M夫人、R兄弟、L氏）は、定職をもたず、パトロネジ職か、それと密接に結びついた仕事をしている<sup>(38)</sup>。さらに輪を広げると、裁判官や法律家はいる。しかし、裁判官は一種のパトロネジ職の法律家である。従って法律家のみが地位の高い定職をもつものといえることができる<sup>(39)</sup>。以前述べたように、この市の典型的な地区リーダー（この市ではコミティーマンの上に位する）は、「アイルランド系のカトリック教徒で、一生オルバニーに住み、以前肉体労働をしていた四〇歳以上のもの」である<sup>(40)</sup>。

一九七二年当時のオルバニー市の市会議員の職業をみよう。

- 第一区、退職者。第二区、退職者。第三区、酒屋（黒人）。第四区、運転教師。第五区、婦人法律家。第六区、電気工。第七区、退職者。第八区、退職者。第九区、葉問屋。第一〇区、不動産業。第一一区、州上院事務。第一二区、ラジオ修理工。第一三区、宗教関係の道具店。第一四区、労務者。第一五区、独立の保険代理店。第一六区、自動車（シボレー）販売店。第一七区、教師。第一八区、法律家。第一九区、法律家。

これをみると、法律家三名、他に一、二名は上層中産階級とみうるとしても、——退職者の地位は不明であるが、——他は大部分それ以下である。少なくとも三、四名労働者がいることは確実である。

一九七六年当時の市会議員の職業をみよう（このときは、地区は新たに一六の地区に再区分された）。傍線は一九七二年当時と同じ人物である。

第一区、ステイト銀行ビルディング。第二区、酒屋。第三区、陪審委員。第四区、葉関係。第五区、退職者。第六区、州上院事務。第七区、法律家。第八区、運転教師。第九区、自動車セールス。第一〇区、保険代理店。第一一区、宗教関係の道具店。第二二区、州検査官。第一三区、ラジコ修理工。第一四区、不動産業。第一五区、教師。第一六区、ペプシ・コーラ店。

この表をみれば、一九七二年のときと大差はない。いずれも少数のものを除けばよい階級のものとはいえないし、少なくともよくない階級のものはかなりいる。彼らは市会議員であることよってのみ、自分のプレスティッジをもちうるのである。

マシンの尖兵であるコミティーマンの社会的地位は調査しえなかつたので、ニューヨーク市を除いたニューヨーク州の一八市のコミティーマンについて一九二八年になされた調査を便宜上紹介してみよう。<sup>(41)</sup> 上掲表をみると、低学歴のものは半分以上をしめているし、高学歴のものは一割そこそこにすぎない。事務、セールスマン、労働者等地位の低い人たちは六割を占めるし、行政関係の被用者にはパトロネジによって職をえた地位の低いものがかかなりいるはずである。地位が高いか、比較的独立的地位にあるものは二割にもみたないであろう。この調査をした著者は、行政に雇われているもの、および地位の低い被用者の割合が非常に大きく、このため、この州のコミティーマンの大部分が従順な人たちであろうともいっている。<sup>(42)</sup>

私がオルバニーでみた限りにおいても、地位の高いものは若い法律家——彼らは野心的であつた<sup>(43)</sup>——を除けば、コミティーマンの社会的地位は高くない。

近郊でこの製缶工場を經營する活力に富む新鋭の郡共和党議長はこういつている。「われわれは政治を軽くみている。が、民主党員には政治は生活そのものだ。

あるものには政治は宗教以上のものだ」と。オルバニーで比較的著名のものは、銀行家を筆頭にフォート・オレンジ・クラブに属しており、彼らの多くは通常共和党を支持する。が、だからといって政治に深くかかわり、

共和党のためにとくに拠金することはまずない（知事が共和党のロックフェラーであつたから、共和党を支持すれば、経済的に有利になりもしたが）。しかし民主党の側は別である。マシーンに属しそれに奉仕することによって

れなりの地位をえている人は極めて多い。しかも多くのものはその地位が生活のかたであり、奉仕には生活がかかっている。市のあるエルグダーマンの活動や生活を前にみたことがある<sup>(44)</sup>。なかには比較的地位の高いものもマシーンに奉仕している。最も目だつのは法律家である。彼らの活動は日本では想像できないくらい活潑である。若い法律家はマシーンに密着しながら（密着しない法律家も多いことに注意せねばならないが）、社会的階梯をじょじょに上ってゆく。以前に密着しながら（密着しない法律家も多いことに注意せねばならないが）、社会的階梯をじょじょに上ってゆく。以前のべたように彼らが目ざすのは高い司法関係の地位である<sup>(45)</sup>。かつてシカゴのデイリー市長はこういつたことがある<sup>(46)</sup>。彼

ニューヨーク州18市の“コミティーマン”の職業

	名	%
行政関係の被庸者	997	19.3
弁護士	186	5.2
他の専門職の人たち	145	4.0
商人	219	6.0
企業幹部	219	6.0
事務, セールスマン, 労働者	2,152	59.5
	3,618	100%

同 学 歴	名	%
グラマースクール以下	2,212	55.3
ハイ・スクール	1,320	33.0
カレッジ及びプロフェッショナル	467	11.7
外国の学校	—	—
	3,999	100%

説 自身貧しい法律家であった。

論

政党は普通の人間を昇進させるものだ。金持ちは自分の金で当選できる。しかし、私のような並の人間には政党が必要だ。政党がなければ、金持ちだけが役職に選ばれることになる。

いうまでもなく、ここに政党とは、(シカゴ) マシンであった。

### 三

マシンの頂点近くにいるものは、政治的に有力であるが、階級は概して高くない。では、市で階級の高いもの、あるいは市で一般的に有力なものは、市の政治行政にどれぐらい力をもっているであろうか。

アトランタ市の権力構造を調査したある著者によれば、この市で政策の基本をきめるのは、大部分が実業家である四〇人ほどの「権力リーダー」であるという。この権力の下部構造をなしているのは、公選、任命を問わず市職員を含む約七〇〇人ほどのもので、彼らはピラミッドの頂点を占めるごく少数のものが決めた政策を実行する。この権力構造は、「支配的な政策立案グループが行政機構を利用し、それを、その利益に合致する一定の目的達成のための官僚機構とする」という構造である。一般にアメリカにおいて実業家が有力な階級であることはいうまでもない。アトランタ市の調査方法が正しいとするなら、この市は現代いわば△典型的な▽実業家支配の例を示すものであろう。これほど典型的な実業家支配の都市はそうはないかもしれない。

マシーンが政治行政を支配するところ、つまり階級の低いものの組織が政治行政を牛耳っている都市では、実業家たちはどのような位置に在るであろうか。実業家たちでマシーンに属さないものはかなりいるはずである。そこから排除されているものも多かるう。が、その場合にも実業家は政治行政を牛耳っているマシーンとは何らかの関係をもちたざるをえないであろうし、マシーンが実業家から支持をえ、関係をもつことはさして困難ではない。一九世紀末における都市政治の腐敗の一つは、市の権力をにぎるボス・マシーンと、実業界の人たちのくされ縁であった。マシーンと同じように、実業家は利害計算により動くのであり、自分たちの利益を保障してくれさえすれば、マシーンとは容易に協力関係に入ることができる。マシーンが法を強制する機構を手中に収めていけば、実業家は不当な利得を追求しても罰をうけないですむ。デモクラシーを尊重する実業家さえ、利得の見込みがあれば拠金をしよう。実業家全体でなくとも、少なくともその一部はマシーンと結びつき、これと共存することができる。

だが、下層の移民の支持のもとに権力を維持してきたマシーンと尊敬すべき階級である実業家の関係はしかく単純ではありえない。一九世紀八〇年代のデトロイトでは、移民を指導する地位の低い人たちが民主党マシーンを牛耳り、政治や行政を掌握した。このマシーンは利権によって実業家と結びついたが、それは一部の実業家であった。共和党を支持していた地位の高い多くの実業家はこれから離れていたし、またマシーンからしめだされてもいた。「一八九二年までは、実業界の合理的な秩序が古くからある民主党支持の下水・舗装コンパインによるときどきの腐敗に対し勝利を収めて」<sup>(48)</sup>もいた。改革運動のイニシアティブをとり、有名な改革派市長となるピングリーを市長の座に送りこんだのも、この実業界である。実業家たちがマシーンに対抗し、かえって民衆と同盟することも稀ではない。

労働をする人が誰が自分たちの味方かを見分けるのはむずかしい。……絹の靴下をはく人たちが利権に反対し、労働する人たちが自分たちの味方であると考えてきた人たちの大部分はわれわれに反対して「利権の要求をいれて」投票した。恥ずべく、か

つ憤まんやるかたなきこと。<sup>(49)</sup>

ピングリーは市長になって、行政の不正を根絶しようとしたばかりでなく、市憲章を改革しパトロネジを利用することによって都市行政を集権化し、市長の権限を強化した。「それは、明らかに、実業界の最良の側面を市行政のなかにくみこもうとすることであつた」<sup>(50)</sup>。責任あり効率的でクリンな行政こそは数多くの「改革」的市長の目標であつた。「この点では、デトロイトの例は他の都市と大差はない。」が、市長が改革に徹底するようになると、実業界は彼に反対するようになる。これも他の都市の場合と同じであらう。

一般に実業家がアメリカ社会で尊敬をうける有力な人たちであり、市の政治や行政に関心をもち、発言権をもつものが多いことはいうまでもない。しかし、関心や影響力の強さはまちまちであらう。都市の政治行政に関心をもちたくないものもいよう。マートンは、アメリカのある都市を調査研究し、有力者のタイプを二つに分けた。<sup>(51)</sup>主として自分の関心を地方社会に限っており、より広い社会への関心を示さない、というよりそれが目に入らない「地方的」なタイプと、より広い社会に一層強い関心を抱く「コスモポリタン」なタイプとである。後者は地方社会には経済的にも感情的にも根を張らない。住む市も「十分快適な町」とすることはあつても、多くの快適な町の一つとみるだけであり、昇進は移転とともにあると意識している。彼らの方が概して地方的タイプのものよりも収入も教育もよく、管理職や専門職のものが多い。彼らが市の政治に関心をもちたないというのではない。とりわけ改革運動に加わるものが多い。しかし地方的タイプのものに比べれば関心は低いのである。

業種によつても異なるらう。銀行家はいずれの都市でも有力であるに違いない。市の銀行家は、「実業家仲間の影響力の中心で、仲間のリーダーとして動き、行政との交流でこの仲間を代表するのは頭取の仕事の一部である。多くの銀行は憲章により市の外で仕事をなすことが制限され、従つてこれらの銀行は、自然、憲章によりこうした制約をうけない

銀行よりも、地方の事がらに大きな影響をもつ」ことになる。<sup>(52)</sup>市の事がらに最も活動的なのは、一般に、デパート経営、公益的な職業、不動産業、銀行家、新聞社である。都市開発が重要になっている現代、これらのものは一層市行政に関心をもたざるをえなくなっている。鉄道や製造業はこれらのものに比べれば、それほどでもない。「われわれの家も工場も市のなかにない。市にあるのは事務所だけで、市の条件がうるさくなれば、事務所をすぐに閉鎖したってよい」のである。

アトランタ市は実業家支配の典型的な例であるが、それは一つの例でしかないといえる。実業家が全体として政治行にあまり大きな力をもたない例さえあまたある。アトランタの例はよく——ダールが調査した<sup>(53)</sup>——ニューヘヴンの例と対比される。この調査によると、権力は多元的に分れており、政治、経済、教育、社交・慈善の各活動において、それぞれ違ったタイプのものがリーダーシップを發揮しているし、またこれらリーダー間に一体的結合はないという。あの領域でリーダーシップを發揮するものが他の領域でもリーダーシップを發揮することは少なく、彼は他の領域では他の人たちのリーダーシップに服しさえする。市の名門旧家は、教育や社交・慈善活動ではリーダーシップを發揮するが、政治や市の経済の領域ではそうではない。政治的に活動的なのは下層の階級を基盤にしたマシーンであった。また、各領域では、比較的少数のものが「直接的」影響力をもつが、その場合にも外の多くのものが「間接的」影響力をもっている。ここではアトランタのように実業界の支配は貫徹していない。

アメリカにおける都市の権力構造のタイプとして、一つには、実業家たちの一元的支配の典型的なタイプとしてアトランタ型と、また一つには、権力が多元的に分化したタイプとしてニューヘヴン型がある。しかし権力構造のタイプはこの二つにつきるものではない。例えば、シカゴにおいては、民主党マシンの頂点にあるもの——彼らの多くは実業家ではない——は、どんな事がらの決定においても極めて大きな力をもっており、実業家たちを△抑えて▽いる。か

つて、(デイリー市長の前の) 民主党の市長であったケリー市長は△クリンな▽実業家市長であったが、党組織も行政も把握することができず、弱い市長であった。ところが、政治によって△成り上▽り、彼をけ落して市長になったデイリーのリーダーシップは強力であった。ただ彼のリーダーシップの強力さは自らイニシアティブをとって押しついたり、押えついたりするものではない。利害関係者の妥協(それが可能な場合)をまち、結果を批准するというものであった。妥協が成立しない場合には決定をできるだけ先にのばすという。同時に、関係者が陳情・圧力をかけにくるよう勧誘し、圧力の大きさとその性格により、△代表性▽いかんを知り、これを評定するのである。<sup>64</sup>シカゴは、マシーンが強力で、実業界が政治・行政にあまり力をもっていない都市の例である。

ある著者によれば、アメリカでは、「公選による職にないものが数多くの重要な決定に極めて重要な役割を果たしている」という。<sup>55</sup>この一点だけはアメリカのどの都市をとってみてもいえる。相違は量の相違にすぎない。ニューヘヴンやシカゴでは、公的決定が極く少数のインフォーマルなパワー・エリートによってなされるとはいえないが、やはり公的地位についていない人びとからの影響をうけている。実業家についていえば、アメリカでは彼らは概して公職につかず、間接的に、あるいは背後から政治に影響を与える。しかしながら、それは実業家が政治を軽蔑するから——政治はかつて地位の低いボス・マシーンの人たちの独占物であった——でもあるが、それ以上に重要な理由は、選挙にでも選ばれる公算が少ないからである。彼がアングロ・サクソン、プロテスタント、もしくは共和党であれば(しかもこれら三つを兼ねることが多い)、多くの大都市では高い公選の職には△不適格▽なのであった。政治や行政に関与しようとする実業家が自ら選挙にうってでて、公選の職にあって発言するというイギリスの場合と異なる。

こうして、バンフィールドたちは、アメリカにおいては、実業家をめぐる権力構造は都市によってかなり相違があるとし、これを六つのタイプに分けた。<sup>56</sup>

- (一) 政界と実業界いずれもが高度に集権化され、いずれも実業家エリートに直接コントロールされる都市。グラス、アトランタ。
- (二) 双方とも集権化されているがエリート実業家が政治ボスを通じ間接に政治をコントロールしている都市。マシオン政治の古典的な例。
- (三) 双方とも集権化されているが、エリート実業家も政治ボスも他方に意志を押しつけない都市。ピッツバーグ。
- (四) 政界しか集権化しておらず、実業界があまり政治に影響を及ぼしえない都市。シカゴ。
- (五) 実業界しか集権化しておらず、政界にあまり影響をおよぼしえない都市。ロス・アンジェルズ。
- (六) 双方とも分権化され、実業界の影響が極小の都市。

都市の権力構造は——調査方法の相違によるズレもあるうが——決して同じものではない。

(第三節未完)

- (1) 『北大法学論集』第二七卷第三・四合併号、「アメリカにおける都市政治の一例 序説」、同第二九卷第三・四合併号、「アメリカにおける都市政治の一例——党組織——」。
- (2) Higham, John, *Send These to Me*, 1975, pp. 20~1.
- (3) Lieberman, Stanley, *Ethnic Patterns in American Cities*, 1963, p. 66
- (4) Hofstadter, Richard, *The Age of Reform*, p. 175, 清水沢一五九頁。
- (5) Lieberman, *ibid.*, pp. 109, 113.
- (6) Barton, Josef, J., *Eastern and Southern Europeans, Ethnic Leadership in America*, edited by John Higham, pp. 159~60.
- (7) *ibid.*, p. 160.
- (8) Lieberman, *ibid.*, pp. 46, 57.
- (9) *ibid.*, pp. 109, 113.

- (10) Wirth, Louis, *The Ghetto*, pp. 226~28.
- (11) Higham, *ibid.*, p. 39.
- (12) Higham, *Strangers in the Land*, p. 39.
- (13) Higham, *Send These to Me*, p. 45.
- (14) Higham, *Strangers in the Land*, p. 39.
- (15) この二の足踏は「E・J・クネカ、アール・E・スライヤール、J・Q・カイル」の著述である。  
 Gosnell, Harold F., *Machine Politics—Chicago Model*, 1937; Merton, Robert K., *Social Theory and Social Structure* ;  
 Banfield, Edward C. and Wilson, James Q., *City Politics*.
- (16) Banfield and Wilson, *ibid.*, p. 115. この著書は、その中に判り切ったこと。
- (17) Addams, Jane, *Democracy and Social Ethics*, 1902, p. 254. Banfield and Wilson, *City Politics*, p. 118 に引用。
- (18) Shannon, William V., *The American Irish*, New York, 1963, p. 78.
- (19) Higham, *ibid.*, p. 115.
- (20) *ibid.* トーマス・スライヤールの著述が、カトリック教会にローマ・カトリックの著述であること、トーマス・スライヤールは、例えは Cross  
 Robert D., *The Irish Ethnic Leadership in America*, pp. 182~84.
- (21) Bryce, James, *The American Commonwealth*, 2nd ed., London, 1891, 11, pp. 29~36.
- (22) Higham, *ibid.*, p. 109.
- (23) Frederic, Harold, *The Damnation of Theron War.*, New York, 1896, pp. 75~6.
- (24) Lieberson *ibid.*, p. 46.
- (25) Lieberson, *ibid.*, pp. 46~7. 著者 Duncan, Otis Dudley, and Lieberson, Stanley, *Ethnic Segregation and Assimilation*,  
*American Journal of Sociology*, 1959.
- (26) Lieberson, *ibid.*, pp. 56~7.
- (27) *ibid.*, pp. 107.
- (28) *ibid.*, pp. 109, 110~113.

- (29) *ibid.*, p. 163.
- (30) *ibid.*, p. 162.
- (31) *ibid.*, p. 167.
- (32) Higham, *ibid.*, p. 242.
- (33) *ibid.*, pp. 233~4.
- (34) 例えは Greenstone, J. David and Peterson, Paul E, *Race and Authority in Urban Politics*, 1973.
- (35) Guterbock, Thomas M, *Machine Politics in Transition*, 1980, pp. 224~5.
- (36) *ibid.*, p. 36.
- (37) *ibid.*, pp. 36~7.
- (38) 「アメリカにおける都市政治の一例——党組織」同四〇八一九頁。
- (39) 同四〇九一〇頁。
- (40) 同四一五頁。
- (41) Mosher, W. E., Party and Government Control at the grass roots, *National Municipal Review*, XXIV(January 1935), pp.15~18, 38.
- (42) *ibid.*, p. 55.
- (43) 拙稿同四一四一五頁。
- (44) 注(37)参照。
- (45) 拙稿同四一九一〇、四二二三頁。
- (46) Royko, Mike, *Boss*, 1971, p. 84.
- (47) Hunter, F., *Community Power Structure*, 1953, p. 102.
- (48) Holli, Melvin G., *Reform in Detroit*, 1969, p. 27.
- (49) *idid.*, p. 41.
- (50) *idid.*, p. 30.

- (51) Merton, *ibid.*, X, ex. pp. 395~398.
- (52) Banfield and Wilson, *City Politics*, pp. 261~3.
- (53) Dahl, Robert A., *Who Governs?* 1961.
- (54) Banfield, *Political Influence ; A New Theory of Urban Politics*, pp. 270~1.
- (55) Banfield, *ibid.*, p. 61, 287.
- (56) Banfield, etc., *City Politics*, pp. 273—76.

Boss-political machine in an American city  
in the State of New York  
— Social Status of machine members

Koichi OGAWA\*

This paper is a part of a series of papers dealing with the various aspects of a political machine in an American city. It is concerned this time particularly with social status of those who belong to it, and those who support it, respectively.

To approach this problem, it is necessary to see a historical background of political machines in general, how they were able to prosper at the turn of the century almost overall in the United States. Their prosperity was closely related with "the New Immigrants" coming as unskilled workers whose lives were precarious and social status were quite low. They were a base supporting political machines in cities.

Does this historical background still continue after the New Deal and the Second World War? If so, have political machines been able to subsist still, though not to prosper? I approach to this problem by means of a direct survey, though quite limited, which I made twice in 1972 and 1976 in the city.

Then, we see what positions people of political machines occupy in community power structures. But I cannot but limit this paper this time to introduction of some case studies of several cities investigated by eminent researchers in the United States.

---

\* Professor of the History of Political Ideas in Europe, Faculty of Law, University of Hokkaido